研（様式１６－１号）

２０２３年3月２４日

中央大学特定課題研究費　－研究報告書－

所属	文学部	身分	教授
氏名	田口　卓臣		
NAME	TAGUCHI TAKUMI		

中央大学特定課題研究費による研究期間終了に伴い、中央大学学内研究費助成規程第 15 条に基づき、下記のとおりご報告いたします。

１．研究課題

核時代における人間の変容に関する系譜学的研究：＜見えないもの＞の現われを中心に

２．研究期間

2020・2021・2022 年度　※2022 年度は新型コロナウイルス感染症特例対応により 1 年間延長

３．費目別収支決算表

掲載省略

４．研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果　和文 600 字程度、英文 50word 程度）

（和文）

私は本研究において、大地震、大津波、原発事故という三重のカタストロフィーとして現れた＜3.11＞の衝撃を背景として、20 世紀を通じて漸進的に成立した「核時代」における人間の在り方の変容について、思想史的・科学史的な観点から跡付けることを目指してきた。

コロナ禍の影響で研究期間を延長し、研究計画も縮小を余儀なくされたが、（１）人間の認識スケールをはるかに凌駕する＜地質学的時間＞を持った放射性物質の客観的実在をどのように捉えるべきか、（２）人間とその製造物の間を隔てる「プロメテウス的落差」の諸相を把握しようとしたギュンター・アンダースの思想を入り口として、20 世紀ドイツのテクノロジー論の系譜（マルティン・ハイデガー、ハンナ・アーレント、テオドール・アドルノ、ヴァルター・ベンヤミンなど）をどのように描き出すことができるか、という二つの主要目的は今でも変わっていない。

上記二つの目的のうち、（１）については、「形而上学的時空差と見えないものの認識」（『モルフォロギア』42 号、2020 年）や、「人間の統御を超えるものたちに関するいくつかの注釈」（『立命館言語文化研究』34（1）号、2022 年）といった成果を挙げ、researchmap にも登録済みである。

一方、（２）については、アンダースの主要テクスト（ドイツ語原文）の精読をほぼ終了したため、今後 2 年の時間をかけて、他の思想家たちとの対立や参照関係を突き止めていきたい。その成果は、中央大学の文学部紀要に公表する予定である。

（英文）

This research aims to explore the transformation of human existence occurred in the Nuclear Age.

First, it analyzes how we should deal with radioactive marerials on a geological timescale.

Second, it analyzes genealogy of the philosophy of technology developed by the 20th-century German philosophers including Günther Anders, Martin Heidegger, and Hannah Arendt.